

被虐待経験にまつわる語りにおける支配的表象の内在化について

—特にオートエスノグラフィーという手法の独自性の観点から—

○日本女子大学大学院人間社会研究科 社会福祉学専攻 博士課程後期 氏名 大門彩香 (009463)

キーワード3つ: オートエスノグラフィー, ドミナント・ストーリー, 社会構成主義

1. 研究目的

本研究の目的と問いは、子ども虐待の被虐待経験にまつわる成人当事者の語りにおける支配的な他者表象や「回復の言説（ドミナント・ストーリー）」の内在化が、どのようにして引き起こされるのかを明らかにすることにある。あわせて本研究では、未だ日本語圏の論文の質的研究法として主流とは言い難い、オートエスノグラフィー（Autoethnography；以後 AE）という手法を選択している。そのため、AE という手法の独自性（AE という手法でのみ照射可能な死角）についての議論も重ねた。また本研究の理論枠組みは、社会構成主義とナラティブ・アプローチの概念（特に「現実の社会的構成」（Berger&Luckmann=1977, 野口 1999：18-20））に基づく。

2. 研究の視点および方法

本研究では、当事者の語りを受ける様々な制約について、性的虐待や性暴力被害といった隣接領域における先行研究を前提に、AE という研究手法を用いた。

前提：①当事者の語りの制約は、「虐待の医療化」（湯野川 2009）や「トラウマの PTSD モデル化」（井上 2021）によって、被害の経験が即座に精神疾患の症状に読み替えられる仕組みのなかで、当事者たちが「専門家の中で承認された回復の物語」（井上 2022）を語るように要請されることによって引き起こされている。②湯野川（2009）曰く、セルフヘルプグループ（以後 SHG）は、当事者の語りに対する解釈共同体としての役割を持ち、その集団におけるドミナント・ストーリーから離れた語りを、「『外』の視点によって補強された」参加者らが自ら「排除」することで、互いに「他のありようを選択肢として与えず」、参加者がその当事者であることを「自明なもの」としてこのグループの参加者に了解させる。③回復をめぐる言説の中には、「その回復の物語を聴きたいと願う他の人々の期待が混入している」（Frank=2002：114）。

研究方法：土元・サトウ（2022）曰く、AE とは「社会科学において、研究者が自ら有する文化」を「理解することを目的とした記述的研究の総称」であり、「1970 年代にエスノグラフィーから派生した」約 50 年ほどの歴史を持つジャンルである。AE には研究方法として特定の手順が定められておらず、その論文の発表媒体や学術領域によって様々な形態をとる。そのためこの手法は手順ではなくその思想的背景と、「社会や権威に対して抵抗・批判する」（土元・サトウ 2022）ものであること、つまり「従来の研究やパラダイムへの

異議申し立て」(石原 2020 : 76) でなければならないという性質に本質をおく。加えて AE の最大の特徴は、語る人と分析する人が同一人物であることによって、Ellis&Bochner (= 2006 : 138-154) の指摘する「フィールドでの時間の限られた調査から、エスノグラファーは、『典型的な』人物や時とか、『一般的な』出来事をつくり出す」が「結局、私が書いたものからわかるのは、その人々が自分たちの世界をどう組織しているかではなく、私が自分の世界をどう組織しているか」である、という限界を超えることが可能となる点にある。そのため本研究では、社会構成主義における「現実の主観的現実と客観的現実の弁証法的関係のうえに成り立っている」(野口 1999 : 19-20) とする概念を分析枠組みとする。AE の本文はライフステージ(子ども期、学生期、援助職期、現在)の区分ごとに、自己もしくは他者から「被虐待経験者」として表象(した)された際の象徴的エピソードを記述した。

3. 倫理的配慮：本報告に関連し、開示すべき COI 関係にある企業等はない。また本研究は、日本女子大学人を対象とした実験研究に関する倫理審査委員会にて承認を受け実施した(課題番号第 682 号)。

4. 研究結果

被虐待経験にまつわる当事者の語りにおける支配的な他者表象の内在化がどのように行われているかについて、次の三点が明かとなった。①当事者が「逸脱」として無力化され沈黙させられた後、専門家等の権威による記号化を内在化し、それを SHG などを通じて外在化し、医学モデルを中心とする社会において客体化されることを繰り返す中で、強固に当事者の中へと内在化されていくこと。②その際に内在化される記号化には、「回復の言説」などの支配的言説が付随しており、それらも同時に、内在化・外在化・客体化の輪をめぐることで、被虐待経験をもつ当事者の語りと生き方を支配していくこと。③そうした内在化をめぐる語りの行為は、決して当事者の能動的な動機や自由によるものではなく、「中動態」(國分 2017)的なものであるということである。

5. 考察

支配的な他者表象のひとつの形態として、記号化というシステムがある。記号化は、それまで不可視化されていた状態や人々を可視化させる力を持つ一方で、人間を非人称化させ無力化させ得る(ラベリング的側面)という両義性を持つ。そのため本研究においては、あらゆる記号化や医療化や言説などについて、その存在の全てを否定するわけではない。しかし、それらのみが真実であり、「正しい」姿であるかのような理解には警鐘を鳴らしたい。また、副次的産物として、被虐待経験に関連する様々な呼称による記号化は、専門家から当事者に対する『良識派』に潜むレイシズム(石原 2020 : 27)を生み出している場合があるという社会課題も抽出された。